

世界批評大系 1

世界批評大系 1

小説批評の成立

筑摩書房

世界批評大系 Ⅰ 近代批評の成立

一九七四年六月二十日初版第一刷発行

1398-28001-4604

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

〒東京都千代田区神田小川町一丁目八 電話 二九一・七六五一 振替東京四一二三

井村印刷／明和印刷 和田製本

第一巻目次

サミュエル・ジョンソン 朱牟田夏雄訳

ミルトン伝

ドニ・ティドロ 阿部良雄訳

美術批評抄

ゴットホルト・エフライム・レッシング 高橋義孝訳

ラオコオン 抄

*

S・T・コウルリッジ 高橋康也訳

文学的自伝 抄

フリードリヒ・シュレーゲル 大久保健治訳

詩についての談話

サント＝ブーヴ 土居寛之訳

文学における伝統について

サント＝ブーヴ 平岡昇訳

『英国文学史』 抄

サント＝ブーヴ 土居寛之訳

夜間公開朗読会の現状とその在り方について

サント＝ブーヴ 支倉崇晴訳

ラシーヌ論

アウグスト・ウィルヘルム・シュレーゲル 登張正実訳

ゲーテの『ヘルマンとドロテア』

E・T・A・ホフマン 渡辺健訳

ペーター・ヴェン 『交響曲第五番』

トマス・ド・クインシー 中野好夫訳

『マクベス』劇における、いわゆる扉たたきについて

ウィリアム・ハズリット 森亮訳

日常の文体について

カール・ゾルガー 柴田翔訳

『親和力』についての書簡

*

マシュー・アーノルド 中川敏訳

ジュベール

エルネスト・ルナン 細田直孝訳

批評のあり方

イポリット・テーヌ 平岡昇訳

バルザック論 抄

ウォルター・バジョット 小池滋訳

チャールズ・ディケンズ

ハインリヒ・ハイネ 山下肇訳

『ドン・キホーテ』の序

ウィルヘルム・テイルタイ 小栗浩訳

人間の一般的な性質を文学はいかにして個性化するか

フェルディナン・ブリュンティエール 佐々木明訳

批評について 抄

ジョージ・セイントペリー 小池滋訳

アレクサンドル・デュマ

アナトール・フランス 太久保輝臣訳

『あらし』

*

ハーマン・メルウィル 金関寿夫訳

ホーソーとその苔

テ・サンクティス 河島英昭訳

フランチェスカ・ダ・リーミニ

ゲオルク・ブランテス 岩淵達治訳

イブセン

*

解説 篠田一士

世界批評大系 Ⅰ 近代批評の成立

訳文中の割註のうち（ ）は原註、〔 〕は訳註を示す。

ミルトン伝

ミルトンの伝記は、すでにいろいろと細かにしらべ上げた上で、多くの形で書かれているから、私としてはたとえばフェントン氏の手になる優雅な略伝に、多少の註を添える程度で満足するのがより適当かとも考えるが、この『詩人伝』の統一上から、やはり新しく筆をおこす必要を感じる。

ジョン・ミルトンは紳士階級の生まれであり、その祖先はオクスフォード州チームに近いミルトン地方を領したが、ヨーク家とランカスター家の争った例の薔薇戦争に際して、ときの当主が伝来の地所を没収された。この先祖がどちらの側に味方したのか私は知らないが、その子孫たる詩人ミルトンは、白薔薇への忠誠をすこしも遺伝しなかった。

詩人の祖父にあたるジョンは、ショットオウヴァの王有林の管理人で、熱烈なカトリック信者であり、その息子を、父祖伝来の宗教を捨てたゆえをもつて勘当した。

詩人の父、すなわち勘当された息子は、これも名をジョンといい、生計の手段として公証人の職をえらんだ。音楽の才にすぐれ、その作曲が今なお多数残っている。公証人としても名声が高く、産をな

して、別の地所に隠退した。その息子である詩人が苦心のラテン詩の一つで言及しているように、おそらくこの父は、標準を越えた文学的教養の持主であつたのだろう。ウェイルズの出身であるキャストンという紳士階級の家の娘と結婚して、この妻によつて二人の息子をえた。長男が詩人ジョンである。次男クリストファーは法律を学び、法律の教えるところに従つて王党への忠誠を守つたが、そのために一時は議会の迫害を受けた。が兄の縁によつて平穏な生活を送るされ、法廷には立たぬ弁護士として着実に生計を立てたのち、ジェイムズ二世即位〔一六八八年〕のち間もなく、士爵に叙せられ判事に任ぜられた。しかし体質の虚弱さが実務に適せず、間もなく勇退したために、不名誉な妥協を強いられずには幸いであつた。

〔王と議会の衝突が一六八八年の名義革命となる。もし官職にあれば王への忠誠をなほどこ犠牲にして議会側と妥協の要があつたわけ。〕

この父にはまた娘アンがあり、この娘を彼はかなりの婚資をつけて、シュルーズベリ出身のエドワード・フィリップスと結婚させた。この夫は大法官庁刑事部に勤めて次席書記まで昇進した。この夫によつてアンは、ジョンとエドワードの二子を生み、この二子は詩人の手で教育された。詩人の家事についての唯一の信頼しうる記述を

提供しているのはこの二人の甥である。

詩人ミルトンは一六〇八年十二月九日、午前六時から七時の間にロンドン、ブレッド街、翼をひろげた鷲の標識のある父の家で生まれた。彼の教育について父は細心の注意をはらったらしく、はじめはトマス・ヤングの監督下に個人教育を授けられた。のちにハンブルクの英人商人団付の牧師になった人物だが、弟子ミルトンが書簡体の哀歌一篇を献じているところを見ると、相当に評価するに足る人物と考えてよい。

やがて彼はギル氏を校長にいたたくセントポール校に送られ、一六二四年二月十二日には、十五歳とわずかでケンブリッジ大学クライスト学寮に、特待生として入学した。

当時の彼はラテン語にいちじるしく熟達しており、彼自身、初期のラテン語詩作には一々自分の年齢を添えて、その才の早熟ぶりに後世の注目をひこうとしているかに見える。こういう自負の行為は、かの学識高かったポリツィアーノ（十五世紀の人物）の例にならったものだが、実は彼程度の詩作の才を凌ぐ例はすくなくなく、とりわけ彼と同時代のカウリーは、明らかにミルトンを凌いでいる（カウリー、一六二八年の『詩人伝』の冒頭にこの詩人の評。頭脳の能力を評価することは困難伝をおき、大いに彼を推奨している）。園（ミルトン）のような作品に達しえなかったものはすくなくないのである。

十五歳で（満十六に達するまで彼は十五歳と記しているが）彼は「詩篇」のうち一一四と一一三六の二篇を翻訳あるいは詩化して、これを公刊に値するものと考えたが、これらは決して大きな期待を抱かせるものではない。人数の多い学校でなら、賞讃はえたとしても、驚嘆の的となるというものではなかった。

彼の哀歌の多くは十七歳のときに書かれたものらしく、このことから察するとその頃ローマの文人たちを、正確な識別力をもって読みわけていたらしい。私はかつてポリュビオス（ギリシヤの歴史家）の訳者ハンプトン氏（一七二八）から、文芸復興以後、ミルトンは古典的優雅さをもってラテン詩を書いた最初のイギリス人だという言葉を聞いたが、これは事実だと思う。例外がありうるとしてもそれはきわめて少数で、エリザベス朝の誇りであったハドンやアッシュムのごときは、散文では成功をおさめたにせよ、韻文を試みた途端に嘲笑を招くはかばかかった。もしミルトンの哀歌以前に注目に値するものがこの国に生まれたとすれば、それはアラバスターの『ロクサナ』（一五九二年ころに書かれたラテンによる悲劇）であらうか。

大学の規程として要求されたこれら詩作のうち若干は、後年本人の手で公刊された。それらは多くの者のなしえない秀作であり、明らかに学内で喝采も受けたであろうが、なお彼がその所属学寮で大きな愛情では遇されなかったと考えてよい理由がある。彼が特選給費学生になりえなかったことはたしかだが、彼の受けた好意のない扱いは決してそういう消極的な面だけではなかった。私は残念ながら真実と思われる話を語らねばならない。それはミルトンが、オグスフォード、ケンブリッジ両大学を通じて、体罰という公けの屈辱をなめた最後の学生の一人だったということである。

敵意にみちた論戦の勢いがあまって、彼のことを大学から追放された身だと非難した者があった。これは本人も落ちついて否定しているし、真実でないと思われるが、チャールズ・デイオダーティ（ミルトンの若いころの親友。イタリヤ系で、一六三八）によせた彼自身の詩作（年若死したときミルトンはラテン語で悼詩を作った）から、彼が「停学」の憂き目に逢ったことは明らかと考えられる。

一時帰郷を命ぜられて、その結果はおそらく一学期の損を招くわけである。

Me tenet urbs reſtuâ quam Thameſis aluit undâ,

Meque nec invitum patria dulcis habet.

Jam nec arundiferum mihi cura reviſere Canum,

Nec dudum vetiti me larvis angit amor. —

Nec duri libet uſque minas perferre maſtri

Cæteraque ingenio non ſubſeunda meo.

Si ſit hoc exilium patrios adidiſſe penates,

Et vacuum curis otia grata ſequi,

Non ego vel profuſi nomen ſortemve recuſo,

Lætiſ et exilii conditione fruor.

(大意) われは今、テムズのはとり、父の家にありて、キャム川とのかたわらのわれを追ひし室にもどらんとも思わす。…今こそは、きびしき教師の脅迫を軽んじ、わが性のたえがたきその他もろより逃避せん時ぞ。静かなる楽しみをほしいままにすべく父のもとにあるを追放というならば、わがえらびし追放の名も運命もわれはいとわじ。

この中の 'vetiti larvis' 「われを追ひし室」の一句には、いかに好意と尊敬をもって解釈しようとしても、上記以外の意味は考えられないし、また、「追放」にも他の解釈のしようはない。彼はさらに「きびしき教師の脅迫」や「わが性のたえがたきその他もろ」にたえるのに倦んだ、と述べている。脅迫の上を越すものはおそら

く処罰である。同時にこの彼の「追放」を述べた詩は、その追放が永久的なものでなかったことも明らかにしている。それはその最後が、いつの日かはケンブリッジに帰る決意でおわっているからだ。また、この追放の思い出を欣然と文字にして千載にこそうとしている態度から、その原因が屈辱的なものでなかったと推測することも可能であろう。

彼は、だれも取る学位を二つとも取った。学士の称号は一六二八年、修士のそれは一六三二年である。が大学を去る彼の気持には、その制度への愛着はいさかもなかった。そういう疎外が教師たちの愚昧なきびしさから来たものか、それとも彼自身のあけ足通りの意固地さが招いたものか、今となつては原因のつきとめようもないが、結果のほうはその著作の中に明らかである。ハートリブ「コンド人」に献呈した彼の『教育論』(一六四四)は、すべての大学教育の廃止を主張している。それは大学の教育が、文法からはじまていわゆる文学修士の称号を得るまで、明けても暮れても文学的教養の蓄積にばかり全時間を費やせるように意図されているからというのだ。また彼の『教会から雇われ牧師を「掃する捷徑を論ず」(一六五九)で彼が賢明にも提案しているのは、「法令によつて公益の用途のために没収された土地からあがる収益は、全国の専門アカデミ学校の経費にあて、それらの学校では古典語学と諸学とが同時に教えらるるようにする、そうすれば青年らを、十分な教養と正業とを二つながら身につけけるように教育することができ、才能ある青年らはその結果として、(十分一税の恩典にあずからずとも)後者によつて生計を立てることができ、同時に前者のおかげですぐれた説教者となることができる」ということであつた(十分一税は教会と牧師の維持にあてられた)。

当時の専門教育に対する彼の非難の一つは、「教会に入つて聖職に就くべき連中が、劇の上演をゆるされ、聖なるべき四肢をねじまげたりぐにやぐにやにしたりして、トリンキエロやら道化役やら女衒やらまがいのあらゆる醜怪ないかがわしいしぐさをして見せ、自分らの奉ずる、あるいは近く奉ぜんとしている聖職の權威を、廷臣や宮廷婦人や、そのまた従者や女家庭教師やの目の前に恥さらしにする」ことであつた。

こういう非難は、自分が学寮から追放されたときのことを語つて、演劇の楽しみが与える慰さめをいとも鷹揚に述べる人物にしては、まことに氣むずかしいといわねばならぬ。当然演劇は、学生が上演する場合にのみけしからんという理窟である。

彼自身も教会入りの意図で大学に進んだのだったが、やがて氣持をかえることになった。本人の言によれば、聖職に就く者は「おのれの意志を捨てて教会の奴隸たることを誓い、その上、伸縮自在の良心の持主ならば知らず、あとでたちまち破らねばならぬ誓いも立てねばならぬ。屈辱と偽誓であがなわれてはじめられる拡声器役より、自分は罪なき沈黙をえらびたい」と考えたからであつた。

これらの言葉は、三十九個条の教義への宣誓署名に關していわれているのだが、実はより多く教会のもろもろの掟への服従に關連しているように思われる。私は三十九個条のうちに、彼の信条に背反するかに見えるものがあるとは思われないが、服従という一事にかなば、教会の掟であれ法律の掟であれ、彼の憤激を買わずにはおかないのである。

牧師職に就きたがらない彼の氣持が、まだそれを拒否するというまでにはつきりとは固まらない段階かと思われるが、ある友人への

書簡に見えている。その友人はミルトンのどつちつかずのぐずぐずした生活責めて、それというのでも医しがたい旺盛な知的好奇心のせい、氣のむくままにさまざまの知識を追うぜいたくさのせいだとしたらしい。それに対してミルトンは冷静にもっともらしい返事を書いて、決断のおくれているのは漫然といろいろなものを学ぶよろこびからではなく、自分の仕事へのより多くの適格性を得たいからだ、このようにしていることで適格性を増す便になるなら、おくれることは意に介しないのだと、説得を試みている。

大学を出ると彼は、その頃バッキンガム州のホートンに住んでいた父のもとに歸つて、そこに五年をすごした。その間にギリシャ、ラテンの著作家の全部を読んだとつたえられる。この全部というのがどれほどの割引を加えて理解さるべきか、教えてくれる人があるなら伺いたいものだ。

それほど読書に精を出したのなら、他のことに手を出す余裕はなさそうに思えるが、ミルトンは仮面劇『コウマス』を書く時間を見いだした。この劇は一六三四年、当時ウエイルズ総督の居城だったラドロウで上演され、総督ブリッジウォーター伯爵の二男一女が出演するという名譽をえた。物語はホメロスの「キルケ」に拠つたものだが、もし今の人がだれか、ホメロスから次の句を借りて来たいというなら、われらは何びとに対してもそういう自由を拒否することはできない。

詩人らの唇がミューズの流れにいつもうろつてゐるのは、
そも何者が不滅の泉としてそのうしろに控えているのだから？

〔キルケはギリシャ伝説の魔法の女神で、『オデッセイ』中にも出る〕
〔ただしこの二行の句はホメロスでなくオウィディウスのものである〕

その次の彼の作品は、ケンブリッジの学友キングの死を悼んで一六三七年に書いた哀歌『リンダス』である。キングは、エリザベス、ジェイムズ、チャールズの三代にわたってアイルランド総督を勤めたサー・ジョン・キングの息で、ケンブリッジでは大の人気者であり、同窓の秀才多数が彼の追憶を新たにすべく筆をとった。ミルトンの作は、タスカニー詩の法則にしたがって長い行と短い行をまぜ用いていることで、彼がイタリアの詩人たちにもなじんでいたことを明らかにしているといつてよく、また、英国国教会の滅亡を予言していると解釈される数行によって、同教会への敵意をうかがわせる。

『アルカディアの人びと』を書いたのもこの頃と想像されている。それはホートン居住中に、ミルトンは学問研究からときどき数日を割いて、ダービー伯未亡人の邸のあったヘアフィールドですごしたし、『アルカディアの人びと』は同邸での余興劇の一部をなしたからである。

やがて彼は田園にも倦みはじめて、ロンドンの法学院に部屋を借りることを考えたが、その時母が死んで彼は旅行の自由を得、父の同意と、「思ひは内に秘め、容貌は朗らかに」という古来有名な旅の心得を含んだ、イートン校の校長だったサー・ヘンリー・ウォトンの教訓もえた。

一六三八年、彼はイギリスを去ってまずパリに赴いた。パリではスキュダモア卿の好意によって、当時スウェーデンの駐仏大使の任にあったグロティウスを訪れる機会をえた。パリからは、かねて特に心をこめてその言葉と文学とを学んでいたイタリアに急行、はじ

めは国内を大いそぎで歩きまわるつもりだったらしいが、フィレンツェに二カ月とどまり、同地の芸術院に入して、自作の詩を提出したところ、大いに認められて、ために自己の評価も高まり、「努力と熱心な研鑽をつめば、そしてそれこそはこの生におけるわが勤めと自分は考えるが、生来の強い性向と相まって、何か後世に、その後世がむざむざとは死滅させないだけの作品を残す」こともできようかという希望を、一だんと強めるに至ったらしい。

彼の著作のすべてを通じて、彼には偉大な秀才にとかくありがちな性質、つまりすぐれたゆるぎない自信と、それにともなっている自分以外の者への若干の輕侮とが、あったと思われる。彼ほど多くを書いて、しかも彼ほど人を褒めることのすくなかった者も珍しいのだ。ほめることをまことに惜しんだ人で、それというのものが自己の讃辭の価値を高く見、自分がある人の名をあげれば、それだけでそのあげられた名は、時による磨滅を防ぐ護符、忘却をまぬかれる確実な防腐剤を与えられる、と考えたからである。

フィレンツェでの彼はたしかに、自分の真価が認められないと苦情をいうことはできなかった。カルロ・ダーティは彼に大げさな碑文的文体で絶讃の辭を贈ったし、フランチェニは彼のために頌詩をもした。ただしその第一節は空虚な雑音にすぎず、そのあとはありふれた話題を虚飾の多すぎるまわりくどい言葉で言い立てたものかもしれないが、最終節だけは自然で美しい。

フィレンツェから彼はシエナに行き、シエナからローマに行った。ローマではふたたび学者や貴人らに好意をもつて迎えられた。法王庁図書館の司書をしていたドイツ人ホルステンは、かつてオクスフォードに三年住んだ男で、彼を枢機卿バルベリーニに紹介し、枢機

卿はある音楽会で、戸口にミルトンを待ち受けてその手をとって会衆の中にみちびいた。この席でセルヴァッジは対聯句で、サルシリは四行聯で、彼をたたえたが、どちらも大した価値のものではない。この文学的交歓はイタリア側が得をしたといつてよい。というのはミルトンがサルシリに返した讃詩は、厳格な文法家からは指摘をまぬかれない欠陥があつたにせよ、問題の余地なくミルトン側に軍配をあげさせるからである。

これらイタリアでえた証言については、駄作というほかはないがミルトンは大得意で、自分の詩集の巻頭にこれらを印刷させた。もつとも、それらが *non tam de se, quam supra se* (自分のことを言っているというより、自分のはるか上を言っている) ことくらい、自分にわからないと思つてもらつては困ると、ことわつてはいるが。

ローマでもフィレンツェ同様、滞在は二カ月を越えなかった。もし彼が、案内者をつれて遺跡をうろつき、宮殿を見、絵画の数をかぞえるだけのつもりだったなら、これは十分の日数だったが、イタリアの学芸なり政策なり風習なりの綿密な研究には、明らかに短きにすぎた。

ローマから彼はひとりの修道僧とともにナポリへと歩を進めた。あまり多くを期待できない道づれだったが、それでもこの男のおかげで、かつてタッソーの庇護者だったヴィラの侯爵、マンソーに紹介された。マンソーはミルトンの詩作をよるこんで、貧弱な対聯句を彼に賜わったが、その中ではミルトンの宗教以外はすべて褒められている。ミルトンはそれに答えてラテン語の詩を献じた。これはイギリス人の優雅な教養を高く評価させたにちがいない。

彼の意図は、このあとシチリアからギリシャを訪問の予定だったが、祖国の国王と議会のあいだに紛争が生じていることを聞き、同胞が国民の権利のために戦っている際に、一人外国でたのしく日を送っているよりも、いそいで帰国するのを適當と考えた。そこで、イエズス会の連中が宗教についての彼の勝手な言説に腹を立てて、彼をただではおかぬといきまいての旨を商人たちから知らされたにも拘らず、彼はローマにもどつて来た。別に身に危険はないと判断するだけの分別はあつたから、それまで通りにふるまつてとくに態度はかえず、論争を挑みもせずまた避けもしなかった。彼が、思想的異端のゆえをもつて当時宗教裁判所の手で監禁されていたガリレオを訪れたことは、多少カトリック側の反感を買つたかも知れない。またナポリではマンソーの口から、本来なら自分ほつと君を優遇するつもりだったのに、君は宗教上の問題についての発言でみずからその道をとぎしてしまつた、と告げられた。しかしこのような言動も、相手方の気には入らなかつたにせよ、なお身の危険を招くものではなかつた。ミルトンはさらに二カ月ローマに滞在し、そのあと何の妨害も受けずにフィレンツェに移つた。

フィレンツェからはルッカに行った。そのあとヴェネチアに行き、蒐集した楽譜その他の書籍類を送り出してからジュネーヴに移つた。おそらく彼はこの地を正教の首都と考えたろう〔カルヴァン派神学の本来的住むべき場所を得たかのようにゆつくりとくつろぎ、ジョン・デ・オダーティ〔前出、同姓チャ〕およびフレデリック・シュパンハイムという、学識すぐれた二人の神学の教授と知り合つた。ジュネーヴからはフランスを縦断して、一年と三カ月ぶりに帰国した。帰国した彼は友人チャールズ・デ・オダーティの死を耳にした。

大きな長所を持った人物と考えてよく、それはミルトンが『親友を弔う歌』と題するラテン詩一篇を草するに値すると考えたことにもうかがわれる。ありふれた、しかし幼い、田園調を模した作であった。

彼は聖ブライド墓地というところ〔ロンドン市内〕にあった、ラッセルという裁縫師の家に部屋を借りて、妹の息子たち、フィリップス家のジョンとエドワードの教育にとりかかった。が部屋がせますぎたのでオールダーズゲイト街に庭つきの家を借りた。そのあたりは当時、今ほどは場末でなかったから、街頭の騒音を避けるために、路地の奥の家をえらんだ。この家に彼は、ほかの少年たちも引き受けて、寄宿教育をはじめた。

この、抱負ばかり大きくて実績の情ない点、すなわち、同胞たちが自由を求めて戦っているときいて急遽帰国したくせに、いざその現場に到着すると、憂国の志を私塾の経営などに雲散霧消させてしまふという有様を、いかにわれわれがミルトンを崇拜するからといって、多少の微苦笑をもつて眺めるのを遠慮する必要はない。彼の生涯のこの時期には、すべての伝記者がとかくふれたがらないかに見える。彼らはミルトンが私塾の教師などに身をおとすのが気に入らないのだ。しかし少年たちを教えた事実是否定できないので、ある者は彼が無料で教えたことを、別のある者は彼の動機が学問と道徳を普及させたい熱意以外になかったことを「発見」し、本人自身真実とは断定しえないことをみな一様に言い立てて、賢い者なら別にそれ自体不面目とは考えない行為の弁解を試みている。何しろまだ父が生きていたし、父から与えられるものが不十分だったから、まっとうで有益な仕事をして不足を補ったというまでのことである。

世には、教師としてのミルトンが奇蹟をなしとげたという話があり、オールダーズゲイト街で十歳から十五、六歳までの少年たちに読ませたという、ギリシャ、ラテンの書物のものすごいリストなども伝えられている。こういう話を語る者も聞く者も、どんな生徒にも本人が学びうる以上の速さで教えこむことはできないという事実を一考すべきで、騎手のスピードは馬の能力で制限されざるをえない。一度でも他人を教えようと試みた者なら、自分がいかに遅々とした進歩しかなしえなかったか、気の散る生徒の注意を引きつけ、無関心な怠け者に刺戟を与え、途方もない誤解を正してやるのに、どれほどの忍耐が必要なものか、わかっているはずである。

ミルトンの意図は、普通の学校で授ける教養よりもっと実体的のあるものを教えることにあったようで、そのためにはたとえばウェルギリウスの『農耕詩』とか古代の天文学の論文などのような、自然科学を扱った書物を読ませた。こういう類の改革案は、当時多くの教育立案者たちの頭を忙殺させたものらしく、人生を豊富ならしめるには何が欠けているかをミルトン以上に知るよすがを持っていたカウリーも、その架空の大学に同じような教育課程を考えていた。しかし事實は、外の自然を知ることともそういう知識が要求し包含する諸科学も、人間の頭を大きくあるいはしばしば占める問題ではないのだ。われわれが行動にそなえるにせよ対話にそなえるにせよ、また有用を目ざすにせよひとをよるこぼすことを目標とするにせよ、第一に必要なのは正邪を判別する宗教的・道徳的知識であり、その次には人間の歴史を知り、また、真実を具現化し具体的事例によって意見の合理性を証しうるような実例になじむことである。判断力と道義心こそは、あらゆる時あらゆる所を通じての徳目であり美点で

ある。われわれは四六時中常に道徳家であるが、われわれが幾何学者であるのは時たまにすぎない。われわれが人間の知性と交わることは必要不可欠であり、それに対してわれわれが物質界に思いをいたすのは任意的でありいわば暇つぶしである。自然科学の学識はめったに表に出て来ないから、人は半生つきあつて来た友の静水力学なり天文学なりの技能を察知しえないこともありうるが、徳性や判断力はすぐに表にあらわれるのである。

したがって学校で読まれるべき書物は、最も多くの判断力の公理、最も多くの道徳的真理の原理、最も多くの会話の材料、等を提供する書物であり、そういう目的にもっともよくかなうのは詩人、雄弁家、歴史家などの著作である。

以上のような脱線のゆえに私を銜学的あるいは逆説的と非難することはさし控えられたい。ミルトンは私と意見が合ふぬとしても、ソクラテスはわが味方である。哲学を自然の研究から人生の思索に転じさせたのは彼ソクラテスの努力であった。が私の同意しえぬ改革論者たちは、ふたたび関心の方向を人生から自然にねじまげようとしている。彼らの考えでは、人間が地上にあるのは、植物の生長や星の運行を観察するためらしい。それがソクラテスの意見では、われわれが学ぶべきは、「たとえわが家にいかなる幸運不運がおこつていようと」^{「オデッセイ」中の句}「ア」いかにして善をなし悪を避けるか、なのであった。

制度の当否は、その生みだした結果によって判断できる。奇蹟を生んで然るべきこのミルトンの学校から、知識すぐれた人物が一人でも出たことを私は知らぬ。私の見るところ、ここの生んだ真正正銘の産物は、彼の甥フィリップスがラテン語でものした小冊の詩史

だけだが、読者諸公はこういう書物のことなど、聞いたこともないのではあるまいか。

彼の学校に、彼が手をつけたすべてのことにおけると同じく、この上なく勤勉な努力を彼がそそいだことは、疑問の余地がない。彼の採つた方法のすくなくとも一部は、広く模倣されて然るべきで、それは宗教教育に意をもちいた点である。毎日曜は神学の授業に費された。それには彼は、当時オランダの諸大学でもてはやされた学者達の学説をもとにみずから小体系を造り上げ、それを口授したのだった。

彼は生徒たちに、みずから力学粗食の範を示し、ただ折々、グレイ法学院の風流紳士たちと歓楽の羽目をはずす一日を自分にゆるすのみであった。

彼はやがて当時の論戦に参加して、抗争の焰をあふり立てるのに一役を買った。一六四一年、既成の国教会を相手に、宗教改革論二巻を公刊したのがそれで、彼によれば「学識の点で高位の僧らに劣る」清教徒方に、力を貸そうとしたのである。

これより先^{（一六四一）}、ノリッジの監督^{（一六四一）}ホールが『謙虚なる抗議』を公刊して監督教会制度の擁護を試み、これに対して一六四一年、その姓名の頭文字をとって綴ることであの有名な *Smectynus* という語ができた六人の牧師が、反論を試みた^{（六人は誤まりで五人が正）}。その名は *Stephen Marshall, Edmund Calamy, Thomas Young, Matthew Newcomen, William Spurstow*。この反論にさらに論駁を加えたのがあの学識の高きで有名なアシャーで、そのまたアシャーの駁論に対してミルトンが公けにしたのが、『高位の僧による監督制度について。アーマー^{（北アイルラ）}の大監督ジェイムズの名を冠したるものをはじめ最近の諸論文が、証拠と称するものをあげて右

制度が十二使徒の時代に起源を発するものと主張せるに對し、果たして然りやを論ず」〔一六四一〕と題した反論であつた。

私が右の書の題をこのように長々と書き写したのは、アーマーの大監督アッシャー〔アッシャーが本名。ジュイ〕を輕蔑的に持ち出しているそのやり方で、彼が今や清教徒的な戰闘的態度を採るに至つたことを示すためである。その次の彼の著作は一六四二年の、『教会統制の理、監督制度を排す、ジョン・ミルトン著』で、この書では彼は、自己の能力をみずから高く評価していることを、独りよがりの有頂天さではなく冷靜な自信をもつて明らかにし、何かはまだ本人も知らぬが、自國に利益と名譽をもたらす何事かを成し遂げることを約束している。彼はいう。「かかる仕事は、永遠の精靈に敬虔な祈りをささげることなしには成し遂げえない。精靈はその意にかなう者を、あらゆる発言と知識をもつて富ましめることができ、その祭壇の聖なる火を帯びた天使らをつかわして、意にかなう者の唇にふれその唇を淨化する。かかる祈りにさらに加えねばならぬのは、勤勉な精選された読書、精到な觀察、似つかわしく高貴なあらゆる諸事諸学への洞察、などで、これらがある程度達成されるまで、自分はこの期待を持ちつづけることを辭さない。」これだけの熱意と敬虔さと合理性とを兼ねそなえた約束からひとが期待できるのは、まさに『失樂園』ではなからうか。

同じ年、彼は同じ問題でなお二冊の小冊子を公けにした。彼のことを「大学から、吐瀉物の吐き出されるごとくに吐き出された」と断言した論敵の一人に對しては、彼は一般的な言い方でこう答えている。「私が数年をすごした学寮の研究員たちは、私がごく普通に二種の学位を得て大学を去るとき、もっと大学に残っていれば自分

たちもずっと満足な旨を何度も表明した。——今のような大学で、みなから好かれたあるいは嫌われたからとて、そのために私がすこしでも自分をより高くあるいはより低く評価するだらうなどと考えて私の弱点をにぎつたつもりの人がいたら、それはずいぶん愚かな考えである。ケンブリッジやオクスフォードが長いあいだにわたつてどんな学生を『吐き出した』かを見て、大学というものがわるい学生はどその胃袋に後生大事に残しておく、いい学生が入つて来るとどうもムカついて落ちつかなくなるのだと、見抜きえない医者はよほどの蔽医者である。今の大学は病気で吐くのだが、大学が健康をとりもどすには、強い薬で一度全部吐いてしまふ必要がある。大学が今よりは健康だったころ、そして私の判断の力は効なかつたころだが、私はついぞ大学を心から讚美する氣になれなかつた。まして今はなおさらである。」〔一六四二年の『ある』小冊子への回答〕

これは紛う方なく、自ら被害者と考へている者の言葉である。彼はさらに進んで自身の行動のあとを語り、思想の進展を述べる。そして、放縱の疑いをかけられたのに対してわが純潔なことを説明し、「そういう罪をもし私が正当に着せられるのなら、十倍の恥辱がわが上に下るがよい」といっている。

この冊子における彼の文体は荒っぽいが、おそらく彼の論敵のそれも同様だったのだろう。この荒さを彼は、長い脱線をして、古典の実例を引いて擁護している。ときには彼はユーモアを織りこもうと試みる。「相手は私に、ヘッポコ牧師の卵か、高位の聖職者のただの護衛役か、祭壇だけでなく食堂にもはんべる男などと思われまいためか、しきりに自分をえらく見せようとして、思いつき次第つぎからつぎと、しまらない標語をならべてくれる。言葉が癡癡の発